

噂の男

かぶらやこうし
鋪谷嘴矢

「ちよいとお待ち」

密やかに廊下を通り過ぎていく足音を聞きとがめ、おさとは声をかけた。

障子が少しだけ開いて、隙間から大きな目がのぞく。

「行儀の悪いことをするんじゃないよ。おみね」

それに応えるように障子が開いた。

美しい娘が頭を下げた挨拶をする。

「遅くなって申し訳ありません、おっかさん」

「本当に、少し遅いようだね」

「お稽古が終わったあとで、お師匠さんが、お話をされたんです」

おさとは、じつと娘の顔を見た。

「本当です。疑うんなら明日にでも、およしちゃんたちに尋ねてくだ

さう」

「確かですよ、おかみさん。あたしたちは控えの間で、ずっとお嬢さんを待ってましたから」

後ろに控えたおみつが見かねて助け船をだす。

「何も疑っちゃいないよ。いいよ、さ、もう行きな」

おみねは深く一礼をして障子を閉めたが、その肩は、はつきりと、親を拒んでいた。

おさとはため息をついた。

ついこの間までは、血のつながりこそないものの、いや血のつながりがない仲だからこそ、他人もうらやむ仲のよい母娘として暮らしてきたのだ。

あのことがあるまでは。

この起こりは半月前だった。

江戸でも指折りの呉服屋として、にぎわう白妙屋の店先に男が訪ねてきたのだ。

たまたま店先に出ていたおさとが応じると、髪の毛に白いものが混じったその男は、美野屋の番頭だと身分を告げ、折り入って旦那様に話があると続けた。

その名前には聞き覚えがあった。確か人形町にある小間物屋だ。
大店ではないが、確かな職人をしっかりと抱え込んで品揃えも良く、
通人に好まれる店と聞いている。

やがて、おさとの亭主、燦梧桐と座敷で向き合った番頭は、こう切り出した。

「長い前置きは抜きで話させていただきます。じつは、手前どもの主、美野屋清兵衛の次男、佐吉が、先日、そちらのお嬢様を見かけて、是非、嫁に欲しいと言いつ出したのでございます」

燦梧桐は、ぼんと膝をうった。

「そうか、娘に惚れたか。だが、そいつはちよつと無理だぜ」

若い頃は遊び人として鳴らし、任侠の徒ともつきあいがあったと噂される燦梧桐は、大店の主人に似合わぬ、ざつくばらんな調子で続ける。

「なんせ、あいつは一人娘だからなあ。嫁にやることはできないんだ」
番頭は平身低頭した。

「申し訳ございません。言葉が足りませんでした。当家の佐吉は次男でございますから、入り婿として、こちらの家に入らせてもらうことになります」

「これは、なんとも理不尽なおっしゃりかた」

隣の部屋で話を聞いてたおさとは、我慢ができなくなつて、ふすまを開け、部屋に入りながらいった。

「おい、おさと、盗み聞きはいけねえぜ」

燦梧桐があきれたように女房を見る。

「このような言い方はしたくはありませんが、当家のような大店と美野屋さんとは、少々、格が違うのではありませんか」

「ははあ」

番頭は、額を畳にこすりつけながらも応える。

「おっしゃる通りでございます。しかしながら、当家の旦那さまは、店の格より、内容を吟味されて商うお方と聞いております」

そういつて番頭は背筋を伸ばした。

「その曇りのない目で当家をご覧になれば、まったくの格違い、ではないことがお分かりになると手前どもは信じております」

「確かに美野屋は良い商売をしているな。近頃では大名家と商いを始めているとか」

「その通りでございます」

おさととは、番頭の言葉を遮るへかようにいう。

「だからといって、小間物屋風情ふせいが、失礼ながら思うとおりにいわせてもらいますよ、このあたしが丹精たんせいをこめて育てあげたひとり娘を嫁にくれだなんて……」

「嫁にくれじゃなくて、先方は、こつちに入り婿むこに来るといつてるんだ」

「それこそ、この大店を、たなぼたで手に入れるってことじゃありませんか」

「申し訳ございません」

番頭は再び畳に額をこすりつける。

「いやいや番頭さん、気にしないでくんな。俺もこいつも、ざつくばらんが身上しんじょうでなあ。思ったことが口から出てしまうのさ」

「それにね、一番肝心かんじんなことを忘れてるよ」

「なんだ」

「おみねの気持ちですよ。あの娘の気持ちが一番大事なんですから」

「ああ、それなら大丈夫です」

すつくと番頭が頭を上げた。

「なんです」

「もうお二人のお気持ちはひとつになっておられますから」

「なんだと」

腹の据すわった旦那さん、で通っている燦梧朗さんが目を白黒させた。ふだんのおさとなら笑っただろうが、今は怒りで目の前が真っ赤になってそんな余裕はない。

「まず、おふたりが、一緒にになりたいと当家とうけの主あるじに申し出られたのです」

「よ、よくもそんなウソを……」

「まあまあ、本人に尋ねりゃいいことだ」

すぐにおみねが呼ばれた。

部屋に入るなり、深々とおみねは番頭に頭を下げた。

「先ほどから声が聞こえておりました。お世話をおかけいたします」

「つてえことは、この番頭さんのいうとおりってことか」

「そのとおりです」

おさとは目の前が真っ暗になった。

後添えのちせとして、おみねが三歳の年にこの家に入ってから十四年。

手塩てしおにかけて育てあげ、頭も良く美しく育った娘が、自分の知らぬ間に、他人のものになることを決めていたのだ。

到底許すことなどできない。

そこから、おさとの記憶はとぎれた。

気がつくとおさとは部屋に寝かされていた。すぐに燦梧朗さんごろうがやってくる。

「大丈夫か」

「あたしやどうしたんです」

「覚えてないのか」

「はい」

「ひどく暴れて、美野屋みのやの番頭に飛びかかって、それは大変だったぞ」

「……」

「おさと。実をいえば、俺はこの縁談はなかなか良いと思っている」

「え、なんだって。おまえさん」

おさとは再び目の前が暗くなった。

「俺だって、この世界で大店おおだなを張る男だ。いろんなところから、いろんな話が飛び込んでくる。良い話も悪い話もな。もちろん美野屋の商売も、その儲もつかり具合ぐあひもわかっている。おさと。お前は知らねえだろうが、次男の佐吉さけってのは、なかなかの男なんだぜ。たしか今年で二十二になるはずだ」

「おみねの相手には若すぎますよ」

「佐吉はな、昔、ちよつとぐれて道を外しかけたことがあるんだ。その頃の話も、俺は馴染なじみの親分おやぢから聞いている。若いに似合わず、腹の据わった良い男だぜ、あいつは。頭も切れる。俺も場所はいえねえが、あいつを見かけた事があるんだ。すらつと背の高い二枚目だったよ」

「あんたは、やくざ者に娘をやろうってんですか」

「いやいや、それは昔の話。いまじや堅気だ。だいたい、俺と一緒に商売をやっていくんなら、それぐらいの男でないと釣り合わないだろう」

「だからって、なんだって小間物屋風情に、おみねを取られなきやならないんです」

「おまえが小間物屋を嫌うのは仕方ないが、それをおみねに押しつけるのはよくねえなあ」

貧しい浪人の家に生まれたおさとは、七つの年に、神田十軒店の小間物屋に住み込み奉公に出された。

仕事は辛かったが、決まった時間に食事ができるのが嬉しくて、おさとは懸命に働いた。

十五になった時、藪入りで店の者がみな家に帰り、おかみさんも湯治に出かけ、おさとだけが、旦那の世話をするために残ったことがあった。

その時、おさとは旦那に乱暴されたのだ。

もちろん、誰にもいえなかった。

その後、何度かそういったことが繰り返され、当たり前のようにおさとは身ごもったのだ。

うすうす感じていたのか、それとも店の誰かが告げ口をしたのか、おかみさんから問い詰められたおさとは、全てを白状した。

それから、おさとは小さな家に閉じこめられ子供を産まされた。難産のあげく子供は死産だった。おさとは子供の産めない体になって店を追い出された。

その後、世の中の底辺を流れ続けたおさとを拾い上げてくれたのが燦悟朗だった。腹の太いこの男は、身の上も体のことも、全てを知りながらおさとを嫁にしたのだ。

燦悟朗は、部屋を出ていきながらいう。

「お前が反対するなら、俺はこの話は進めねえよ。だが、一度、佐吉に会ってみるといい。お前のように世の中を広く見た女なら、男の善し悪しは分かるはず。きつとおみねも、そんな日を待っているだろう」
「そんな日は一生来ませんよ」

それから半月後、おみねと口論した三日後に、そんな日が向こうから歩いてやって来たのだった。

口を聞こうとしないおみねと顔を合わせるのが辛く、その日もおきとは店に出ていた。

燦梧朗は所用で出かけている。

奉公人に混じって反物を並べていると、急に手元が暗くなった。

顔を上げると、男が立っていた。

すつきりと背の高い、目元の涼しい二枚目だ。

「お初にお目にかかります。手前、美野屋の佐吉と申します」

あっと思っただけ返そうとしたその時、

「思っていたとおりに、おきれいな方ですなあ」

絶妙な間までそういわれ、気がつくとおさとは奥の部屋で佐吉と向かい合っただけ座っていた。不思議と嫌な感じは受けない。

「おかみさんは、小間物屋がお嫌いだそうですね」

「……」

「実は手前もそうです。だからこそ、お聞きでしょうが、一時は、悪い道にも足を踏み入れまして」

「主人と同じ道を来たから、あたしが許すと思うなら」

「いえ、そうではございません……」

と、突然、佐吉は口調くちようを変えた。

「今から昔話を聞いていただきます。話のあとで手前の顔など二度と見たくないとおっしゃるなら、そういたします」

「いったい何のつもりで……」

かまわず佐吉は話し始めた。さびがきいて良く通る声だった。

「むかしむかし……ある所に子供がおりました。まわりは自分を大事にしてくれますが、どうにもその子は、そこが自分の居場所いばしょではない座りの悪さを感じておりました。やがて、噂話うわさばなしから、自分が実は兄より年上で、訳があつて引き取られた子供であることを知ります。つまりは、自分は親に捨てられた子供だったのです。甘ったれのその子は、悪い仲間とつきあい始めました。おそらくは寂しかったんですよ。でも、その時は、何が何だか分からなかった。ただ苦しかったです。それから逃げるために、いつ死んでもいいような生き方、暮らしを続けようとしたのです。ある時、そいつは、若い頃に、肩で風を切つて

いた大店の旦那という人に出会います。金を本当の力だと勘違いしている爺さんをからかってやろうと、軽い気持ちでちよっかいを出して、反対にあっさりとのばされてしまいました。それからそいつは、その旦那を毎日のようにつけまわし、いろいろと調べ始めました。そして、きれいなおかみのことを知りました。その人は後添えで、旦那と一緒にいるまでは、いろいろご苦労をされたという話でした」

「あんた、何を……」

「やがて、その駄目な若造は、悪い仲間と縁を切り、兄に頭を下げて商売の勉強を始めました。あまりにも悪いことをし続けていたために、はじめは誰も信じてくれませんでした。当たり前です。でも、そいつは、そんなことなど、なんとも思いませんでした。そいつには、やることのできたからです。商売の勉強をして一人前の商人になること。一人前になって、ある人を助けるのです。その人は、子供の頃から奉公に出され、年頃になった時、旦那に乱暴され子供を産みました。そして、傷ついたまま世間に投げ出され、色々な場所で苦労をしながらも決して曲がらず、やがて、立派な旦那に見いだされて、大店のおかみになった人です。馬鹿な若造は、悪い道にいただけに、その人が過ごしていた場所を、ひとつずつ回ることができました。そして、その人が苦しい中で仲間を助け立派に生きてきたことを知ったのです。また、その人が、面倒を避けるために、赤ん坊は死んだと聞かされていたことも知りました。実際、赤ん坊は元気に生まれ、父親の遠縁である同業者に押しつけられていたのですが」

「まさか……あんた」

「三年が経ち、なんとか商売を覚えた若造は、その人の店で働かせてもらおうと、久しぶりに店までやって来て、きれいな娘にぶつかりました。そいつは、いけないと思いつつながら、両親の良いところを併せ持つ素晴らしい娘が好きになってしまいました。でも、この馬鹿が本当にしたかったのは、曲がった性根をたたき直してくれた旦那さんと、その生き方で俺を真人間に戻してくれたおかみさんに恩を返すことなんです。産んでもらった恩をなんとか返したいんだ。もし、あんたが、お嬢さんと一緒になるな、というならそれでいい。俺を、俺をここで働かせてくれ。お願いだ」

「あんた……」

うつむいて涙をこぼす佐吉に走り寄り、おさとは息子をしっかりと抱きしめた。

暖かい背中だった。

やがて、どきっと、おさとの背中に柔らかく暖かいものが被かぶさった。おみねだった。

「おっかさん」

おみねの熱い涙が、おさとの頬を濡らす。

大きな手が肩に回され、間近まぢかで燦梧朗まじろの声が聞こえた。

「佐吉しろたえやが白妙屋しろたえやに来てくれたら、本当の家族ができあがるなあ。おさと」

涙で声が出ず、ただ、おさとは黙うなずって頷うなずき続けるだけだった。

〈了〉